

2022年度 創立者古屋賞・山梨学院スチューデント オブ ザ イヤー賞 受賞者一覧

【創立者古屋賞】							
No.	部門	氏 名	学科	学年	所 属	推薦者	内 容
1	創立者古屋賞	マサキ リュウト 楠 流斗	法	4	レスリング部	カレッジスポーツセンター	・2019内閣総理大臣杯全日本大学選手権大会 フリースタイル61kg級 優勝 ・2020アジアレスリング選手権大会 フリースタイル61kg級 3位 ・2019・2021天皇杯全日本選手権大会 フリースタイル61kg級 優勝 ・2021・2022文部科学大臣杯全日本学生選手権大会 フリースタイル61kg級 優勝
2	創立者古屋賞	クマダイ モモ 熊谷 萌	経	4	スケート部	カレッジスポーツセンター	・2019スピードスケートジュニアワールドカップ(オランダ) 女子500m 2位 ・2020世界ジュニアスピードスケート選手権 女子500m 2位 ・2022第95回日本学生氷上競技選手権大会スピードスケート競技 女子500m 優勝(女子団体 2位) ・2023FISU冬季ワールドユニバーシティゲームズ 女子500m 2位
3	創立者古屋賞	キム チス 金 知秀	ス	4	柔道部女子	カレッジスポーツセンター	・2019グランドスラム・パリ 女子57kg級 3位 ・2019ユニバーシアード 女子57kg級 3位(女子団体3位/韓国代表) ・東京オリンピック2020 女子57kg級 ベスト16(団体戦出場/韓国代表) ・2021アジア・オセアニア柔道選手権大会 女子57kg級 2位(男女混合団体戦 優勝/韓国代表)
4	創立者古屋賞	タカハシ レンリ 高橋 瑠璃	ス	4	柔道部女子	カレッジスポーツセンター	・2019全日本ジュニア柔道体重別選手権大会 女子78kg超級 優勝 ・2020ベルギー国際柔道大会 女子78kg超級 ジュニアの部 優勝・シニアの部 3位 ・2021全日本学生柔道体重別選手権大会 女子78kg超級 優勝 ・2022世界柔道選手権タシケント大会 男女混合団体戦(女子70kg超級) 優勝

【スチューデント オブ ザ イヤー賞・大学院】							
No.	部門	氏 名	学科	学年	所 属	推薦者(敬称略)	内 容
1	学術部門	サトウ ミノリ 佐藤 みのり	院	2	片田 興ゼミ	所属学科	本修士論文は、論文作成に係る問題の背景を踏まえた問題提起、論文の目的・対象・方法等も明確である。そして、本論文の核心はデータ資料を使用した実証分析に基づく考察にある。具体的には、笛吹市とその類似団体を分析対象に取り上げ、今後の笛吹市における上下水道事業の在り方を提示している。 本論文の優れた点は、①他に類を見ない独創性、②従来からの仕事内容を踏まえた実証分析の実施(笛吹市公営企業部・上下水道事業担当)、③笛吹市とその類似団体との相互比較分析に基づく考察等を挙げることができる。具体的には、詳細なデータ分析並びに類似団体との相互比較分析を行い、今後の笛吹市における上下水道事業の在り方を考察して、「広域的な事業の取組みと効率的な事業運営」の必要性を提示している。そして、本論文の最大の貢献は、広域的な事業の取組みが必要になる理由、そして、効率的な事業運営とは何かについて、本論文独自の実証分析及び考察の結果として論及しているところである。

【スチューデント オブ ザ イヤー賞・大学】							
No.	部門	氏 名	学科	学年	所 属	推薦者(敬称略)	内 容
1	スポーツ	アサヤギ ヨシノスケ 青柳 善の輔	法	3	レスリング部	カレッジスポーツセンター	2022年天皇杯全日本レスリング選手権大会 フリースタイル70kg級 優勝 第48回内閣総理大臣杯全日本大学レスリング選手権大会 フリースタイル70kg級 優勝(敢闘賞) 2022年U20世界選手権 フリースタイル65kg級 3位
2	スポーツ	タムラ ケイゴ 田村 圭梧	ス	4	ホッケー部男子	カレッジスポーツセンター	2022年度関東学生ホッケー春季・秋季リーグ 優勝(4季連続22回目) 秋季最優秀選手賞 第71回全日本学生ホッケー選手権大会 3位に主将として貢献、優秀選手賞
3	スポーツ	ニシダ ソウ 西永 空	ス	4	ホッケー部女子	カレッジスポーツセンター	2022年度関東学生ホッケー春季・秋季リーグ 優勝(56季連続56回目 294連勝) 秋季最優秀選手賞 第41回全日本大学ホッケー王座決定戦 3位 第83回全日本女子ホッケー選手権大会 3位に主将として貢献
4	スポーツ	コガ フカナ 古賀 若菜	ス	3	柔道部女子	カレッジスポーツセンター	2022年グランプリ・ザグレブ国際大会 女子48kg級 優勝 2022年アジア選手権大会 女子48kg級 優勝 柔道ワールドマスターズ2022 女子48kg級 2位
5	スポーツ	サイトウ キョウカ 齋藤 京香	ス	4	水泳部	カレッジスポーツセンター	第24回夏季デフリンピック競技大会 100mバタフライ 優勝 2022年ジャパンパラ水泳競技大会 50mバタフライ、100mバタフライ、200m個人メドレー 優勝
6	スポーツ	ミヤザキ カズキ 宮崎 一樹	ス	3	硬式野球部	カレッジスポーツセンター	2022年度関甲新大学野球秋季リーグ戦(1部) 3位 ベストナイン、最多本塁打打者賞、最多安打打者賞、最多打点打者賞 2022年侍ジャパン大学代表強化選手
7	スポーツ	ゴトウ マサシ 後藤 雅史	法	4	バスケットボール部男子	カレッジスポーツセンター	第98回関東大学バスケットボールリーグ戦(2部) 2位(1部昇格)に主将として貢献
8	スポーツ	ヤマダ ルナ 山田 月南	法	4	バスケットボール部女子	カレッジスポーツセンター	第72回関東大学女子バスケットボールリーグ戦(1部) 4位 第74回全日本大学バスケットボール選手権大会 ベスト8に主将として貢献
9	スポーツ	ワカサ タクミ 若谷 拓海	政	4	サッカー部男子	カレッジスポーツセンター	第55回東京都大学サッカーリーグ戦(1部) 優勝 最優秀選手賞 第55回関東大学サッカー大会 Aグループ1位 関東大学サッカーリーグ2部昇格 J3 ギラヴァンツ北九州 内定
10	スポーツ	ハヤマ メグ 浜田 芽来	ス	4	サッカー部女子	カレッジスポーツセンター	2022年関東大学女子サッカーリーグ1部 3位(得点王、ベストイレブン) 2022年全日本大学女子サッカー選手権大会 準優勝 ノジマステラ神奈川相模原 内定
11	スポーツ	アオノ シュリ 青野 朱李	ス	4	陸上競技部(一般種目)	カレッジスポーツセンター	天皇賜盃第91回日本学生陸上競技対校選手権大会 女子100m 優勝、200m 優勝(大会新記録) 2022年日本学生陸上競技個人選手権大会 女子100m 2位、200m 優勝
12	学術部門 (自然)	カザフ ユリナ 田澤 友梨奈	ス	4	三澤 孝康ゼミ	所属学科	本学生は卒業論文において、女性サッカー審判員を対象に試合中に反則が起きた場所から審判が位置していた場所への距離と角度に着目し、誤審が起きる状況を検討した。その結果、最も反則を認識しやすい位置からの角度のずれが45度を境に大きくなることで、誤審と判定を下す確率が高くなることが明らかとなった。この結果より、主審は事象を認識できる角度に注意し立ち位置を取ることが必要であることが分かった。 スポーツ科学部では、本賞の推薦者を選考するため、学部長、副学部長、学年担任からなる選考委員会を立ち上げ、教員から推薦のあった対象者の卒業論文及び卒業論文発表会における発表スキルの評価を行った。その結果、自然科学系分野における研究では、本学生が極めて高い評価を受け、推薦候補者として選出されるとともに、スポーツ科学部教授会においても承認された。
13	学術部門 (人文社会)	イヤマ ミズ 井山 美鈴	ス	4	笠野 英弘ゼミ	所属学科	本研究では、大学水泳部の女子選手10人に対するインタビュー調査を通して、彼女らの多くが月経前症候群などの女性特有の身体的問題を男性指導者に相談しづらかったことを明らかにし、それは、それらの問題が男性には理解されにくいものとして捉えているからだと考察した。そこで、女子選手のスポーツ環境の向上には、女子選手自身の意識改革や男性への積極的な働きかけも必要になることを示唆した。 スポーツ科学部では、本賞の推薦者を選考するため、学部長、副学部長、学年担任からなる選考委員会を立ち上げ、教員から推薦のあった対象者の卒業論文及び卒業論文発表会における発表スキルの評価を行った。その結果、人文社会系分野における研究では、本学生が極めて高い評価を受け、推薦候補者として選出されるとともに、スポーツ科学部教授会においても承認された。
14	(代表) その他 (団体活動・学内活動等)	ヒカワ アユミ・ ニシジョウリコ 樋川歩実・ 西条莉理子	ス	4	ISS広報部	所属学科	本団体は、大学のクラブ活動やアスリートの活躍、ボランティア活動等について幅広く広報活動を行い、学生の活動意欲を高めるとともに、積極的な情報発信により社会における大学の知名度の向上に貢献した。 広報活動は、学生の企画を基本として取材や記事の公開を行っている。具体的には、スポーツ科学部公式SNS(インスタグラム)を運用し、本学クラブ活動に関する広報(大会情報の周知、結果報告、アスリートの特集記事等)、本学が協力するボランティア活動、本学教員の社会貢献活動等に関する情報を発信した。SNSのフォロワーは1300人を超え、過去90日間で計1万アクセスがなされるなど学内外に本学の活動がアピールされている。また、学生チャレンジ制度を利用し、本学のスポーツ活動に関する広報誌を年3回発行した。
15	学術部門	ムレイ タツヤ 牟禮 達也	経	4	蔣 辛未 ゼミ	所属学科	卒業論文「地域密着型食品スーパーマーケットの定義および経営戦略に関する考察」は大手食品スーパーや総合スーパーの出店攻勢により、近年苦境に陥った日本の各地域を中心に店舗を展開している地元の食品スーパーマーケットが今後求めるべき経営戦略を考察した論文である。地元の食品スーパーに関する定義は明確ではないため、本論文では、まず地元の食品スーパーを地域密着型食品スーパーと統一し、その位置づけ及び定義について再考した。次に、14社の地域密着型食品スーパーの2次データを用いて事例分析を行ったうえで、地域密着型食品スーパーの特徴や強みを明らかにし、今後求めるべき経営戦略を整理した。地域活性化が重要視される日本において、苦戦している地元の食品スーパーが生き残るための資料として価値のあるものとなるだろう。経営学部の審査を経て経営学部最優秀論文に選出された。
16	学術部門	コミヤマ モモ 小宮山 萌絵	管	4	宮田 恵多 ゼミ	所属学科	卒業論文「スモモの葉に生息する乳酸菌の分離およびその英膜形成と胃酸耐性の関係性に関する研究」は、山梨県の名産品であるスモモの未利用部分の葉に生息する乳酸菌の分離・培養、食品製造への応用へ向けた基礎的検討を行うことを目的として行った。研究成果として、スモモの葉から乳酸菌の分離、遺伝子解析による菌種の同定に成功した。また、分離した乳酸菌がヒトの消化器官を通過後も生存する可能性が高い基礎的なデータを得た。さらに、分離・同定した乳酸菌は、ヒトに対する安全性が証明されている種類の菌種であることも明らかとした。以上のことから、山梨県の名産品からヒトの健康保持・増進効果が期待できる乳酸菌の分離・同定をすることに成功したため、学術的価値のみならず、地域貢献のための材料になる可能性が高い成果である。

17	学術部門	進藤 有那	国	4	Mike BLOW ゼミ	所属学科	本論文“The Role of Music in the 1960s American Civil Rights Movement and How Music Changed the Society”は、奴隷貿易時代から公民権運動の時代に至るまで、アフリカ系アメリカ人コミュニティにおいて音楽がどのような役割を果たしたかを考察したものである。1920年代後半、アーティストが歌詞に抗議のメッセージを込めることがなかった時代に、隠喩と皮肉をもってアフリカ系アメリカ人の人種差別に抗議した”Strange Fruit”, さらに1960年代から70年代にかけて、歴史的な人種差別に触れつつ未来への希望を込めた歌詞により公民権運動を後押しした”A Change Is Gonna Come”の2曲を取り上げ、歌詞に込められたメッセージとそのインパクトについて、詳細な分析を行った。また、音楽が、歴史的、音楽的、政治的、宗教的にいかにアメリカ社会の人種差別的側面の変化に影響したかについて、深い考察がなされている。さらなる研究へ発展し得る論文として高く評価がなされた。
18	学術部門	石川 結香	政	4	外川 伸一 ゼミ	所属学科	石川結香の卒業論文「ヤングケアラーの実情と背景的要因の分析～負担軽減のための支援体制の考察と提案～」は、近年、ようやく我が国でも問題とされ始めた「ヤングケアラー」について、調査結果に基づき、「ヤングケアラー」の置かれている状況を考察した上で、そうした人々が生み出される我が国の背景に存在する諸要因を析出し、海外の事例を参考にしながら、我が国において実施すべき具体的な支援対策について述べた力作である。 まず、既存諸調査の紹介と分析の過程、その分析に基づいた背景的諸要因の析出、海外の対策事例の紹介、それらを踏まえて自らが考案した具体的支援対策の提案という展開は極めて論理的になされている。 また、本論文の中核に位置する「ヤングケアラー支援の提案」は、①周知・啓発・理解策、②多分野・多機関の連携体制の確立とそうした連携体制に基づいた各種支援、③個々の事例に即応した支援体制に結びつく「サードプレイス」の提供による支援など、今後、我が国で本格的な「ヤングケアラー」支援を行っていく上で極めて示唆的な提案となっている。 さらに、本論文は、本文だけでも30000字を超え、参考文献は21文献、参考サイトは35サイトにも及ぶなど、これら数多くの文献・サイトを参照した上で、それらを効果的に引用している。このことは、極めて的確に付された49箇所の注を見ても理解できることである。
19	学術部門	三井 智彰	法	4	實川 和子 ゼミ	所属学科	三井氏は、国際的な労働問題に高い関心をもち、3年次より外国人の労働問題を研究し、我が国における技能実習制度についてゼミ論文を執筆した。職業選択においても、そうした関心から労働基準監督官を目指し、昨年見事合格を果たした。 卒業論文では、3年次の研究過程で知った人権デューデリジェンス(DD)にテーマを変更し、より広い観点から労働問題の研究に取り組んだ。本論文は、①人権DDという新しいテーマに果敢に取り組んでいること、②国際的な事例を紹介する中でも日本企業との関係に言及するなど当事者性の工夫が見られること、③広く各国の法制度を丹念に調査し比較法的考察を加えていること、④わが国における法制化を強く主張し、そのための施策などをも考察している、などの点において優れている。またこれからの社会を担う一員としての気概を大いに感じる論文でもある。